

Title	竟陵派の文学理論：公安派との差異点に重点をおいて
Sub Title	Literary theory of the Jing Ling(竟陵) School
Author	高, 仁徳(Ko, In-duck)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.52- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

竟陵派の文学理論

——公安派との差異点に重点をおいて——

高 仁 徳

おもに明末の万暦年間に活動した竟陵派については、二つの異なる説がある。つまり、その前に活動した公安派の弊を直すために起ったとする、清初の錢謙益から始まって(1)以来中国文学史の中で通説になっている説と、竟陵派を公安派の亜流として見做す劉大杰氏の説などである(『中国文学發展史』)。ここで公安派と竟陵派の間には、かなり同質的な要素と異なる面を同時に持っているであろうということが自ずから想定される。したがって、竟陵派を研究するのに、おいて公安派との関係をどういうふうに解釈するかは、重要な研究テーマの一つだといえよう。ところが竟陵派についての研究は、公安派に比べればそれほどなされていない。公安派との関係についての研究も、おもに公安派の立場からである(入矢義高氏「公安から竟陵へ、—袁小修を中心として—」・「京都大学人文科学研究所紀要」第十四冊、創立二十五周年紀念論文集所収)。最近になって中国で「竟陵派文学研究会」ができてからは(一九八四年)(2)、竟陵派の評選集『詩歸』などが出版され、竟陵派についても活発な研究がなされている。そして竟陵派がいままで公安派に比べて

低く評価されて来たのに反して、公安派の継承発展者として新しく位置づけられて行く傾向である（もちろん異なる見解もあるが）。筆者はこの問題について、ここであえて結論を出そうとは思わない。ただいままでも公安派と竟陵派の文章を読むうちに考えたことをすこし述べたい。つまり、竟陵派の文学理論及び創作態度について、竟陵派の立場から公安派との差異点に重点をおきながら述べてみたい。またその差異点の中でも、比較的理解が混乱していると思われる両派の「古」に対する態度、つまり復古観の差異点と、両派が目指した詩境について述べたい。そして、おもに創作者の立場から文学を論じた袁宏道に比べて、そうとう鮮明な批評家意識も見せている鍾惺の批評家意識を、彼の「選」についての認識を通じて考察してみたい。鍾惺の批評家意識はいままであまり取り上げられなかったが、鍾惺を評価するのに欠せない重要な一面だと思われる。竟陵派においてはおもにその代表的人物の鍾惺、公安派においてはその中心人物の袁宏道を対象にすることをこわっておきたい。また小論を書くために、前記の入矢義高氏の論文を初めとする既存の研究成果を参考したこともこわっておきたい(3)。

(一) 擬古主義批判と「真詩」

公安派と竟陵派の文学理論についての類似点は、おおむね後七子らの擬古主義を激しく非難した点と、文学作品には作者の性霊、すなわち個性が表われていなければならないという点を主張したことにあると思われる。ここではまずこの点に関して簡単に述べたい。

公安派の文学理論の基礎が後七子らの擬古主義に反対する所に成り立っているのはいうまでもない事であるから、ここでの紹介は省略する。後七子の巨頭王世貞が死んだのは李攀竜の死より二十年後の万曆十八年(一五九〇)であり、そ

の時鍾惺（一五七四—一六二五）はまだ十七歳であつた。けれども擬古主義の余風はなお明末まで続き、鍾惺の文学活動は常に李・王の擬古主義者らとその追従者に対する強い批判意識を伴つていた。次に鍾惺の擬古主義者に対する態度を示している一節を引用してみる。

詩歸一書、自是文人舉止、何敢遂言仙佛！然其理亦自深。常憤嘉隆間名人、自謂學古、徒取古人極膚、極狹、極套者、利其便於手口、遂以爲得古人之精神、且無古人矣。

（『詩歸』は文人の本であり、どうしてあえて仙人、仏家の事まで言うだろうか！しかしこの本の理は深い。常に憤慨したことは、嘉靖隆慶年間の名人が自ら「學古」を言いながら、徒らに古人の極めて「膚」で、極めて「狹」で、極めて「套」のものを取り、書くのと言うのに楽なことをいい事にして、ついには古人の「精神」を得たと思ひ、古人を無視する事である。）『隱秀軒集』・往集・「再報蔡敬夫」

嘉隆間の名人とは李攀竜・王世貞の後七子らである。『詩歸』を選定した理由を説明するにあたって、まず李・王らが徒らに古人の「膚」・「狭」・「套」なる者を取つて古人の「精神」を得たとするのには憤激した事をあげている。『詩歸』の共選者の譚元春も「詩歸序」の中でこれと似た事を言う。すなわち、古人の「滯」・「熟」・「木」・「陋」なるものを得て「學古」を標榜する「妄者の言」を批判しているが、もちろん後七子らの事を指している。ここで鍾惺が心血を傾けて評選した『古詩歸』・『唐詩歸』、つまり『詩歸』を選定した大きい動機の一つが擬古主義者に対する不満であることがわかる。また李攀竜には、李夢陽の「詩必盛唐」を忠実に反映した詩選集『古今詩刪』があつたのでそれも強く意識したに違いない。結果的に『詩歸』は、当時竟陵派を激しく批判した錢謙益も『列朝詩集小傳』・「鍾提學惺」条の中で「承學之士、家置一編、奉之如尼丘之刪定」と記録している程、当時はやつたのである。したがつて次の清初には擬古

派打倒の第一の功勞者として、公安派よりも竟陵派の名があげられるようになり、『列朝詩集小傳』・「譚解元元春」条には「世之論子曰……鍾・譚一出、海内始知性靈二字」という記録も残っているくらいである。その当時に『詩歸』が果たした役割及び經過に関しては入矢義高氏の論文「詩歸について（『東方学報京都第十六号昭和二十三年・京都大学』）」に詳細に論議されている。

ところで鍾惺が非難したのは後七子とその追従者らだけではない。公安派末流の弊害に対しても、しきりに批判的論説を表わしている。次に一節を引用してみる。

今稱詩不排擊李于鱗、則人爭異之、猶之嘉隆間不步趨于鱗者、人爭異之也。……勢有窮而必變、物有孤而爲奇、石公惡世之群爲于鱗者、使于鱗之精神光燄不復見于世、李氏功臣、孰有如石公者？今稱詩者、遍滿世界、化而爲石公矣、是豈石公意哉？

（いま詩を稱するのに、李攀竜―于鱗―を排撃しなければ、人々は争つてこれをあやしむ。これは嘉靖・隆慶年間に李攀竜を模倣しなければあやしんだ事と同じである。……勢は極まれば必ず「変」を爲し、物はひとりであれば「奇」を爲す。袁宏道―石公―が世の人々の群がって李攀竜を模倣するのを悪んだのは、李攀竜の「精神」の光燄が世に表われないからである。李氏の功臣で、袁宏道のような人がいるだろうか？ いま詩を稱する者、世界に遍滿して袁宏道を模倣しているが、これがどうして袁宏道が願うことであろうか？）『隱秀軒集』・具集・「問山亭詩序」

後七子らを追従する風潮が排撃する風潮に変わった事に、客観的であつ批判的な視線を向けている。ここでも鍾惺は「勢有窮而必變」の原理を見出したに違いない。そして袁宏道が世の人々の李攀竜を模倣するのを悪んだのは李攀竜のためであり、したがって袁宏道は李攀竜の功臣であると言ふ。つまり、いま袁宏道を変えるのは、袁宏道の功臣になる

のである。鍾惺の「変」に対しての認識がよく表われている。「奇」は「正」に対して「異」であり、「変」の意味も含めてゐる。そして「奇」を為すのは「孤」であると言ふ。「孤」、つまり「個」である事を願つた袁宏道と鍾惺が、人々を模倣することを悪んだのはいうまでもなく、人に模倣されることも好まなかつたのは当然の事だといえよう。鍾惺が名を成すにつれて、また鍾惺に従う人々が増え始めた。その事を初めて聞いて、鍾惺は驚いて反省したという記録が鍾惺の文集の中にある(4)。要するに、鍾惺も袁宏道と同じく自分の門戸を立てようとした意識はあまりなかつたようである。

このように袁宏道と鍾惺の「個」を重視する態度と、彼らの文学観とは深く関連している。袁宏道は、あの有名な「獨抒性靈、不拘格套」によく表現されているように、作者の個性が形式的なきまりにこだわらなく発露されている文学作品を主張した。この点においては鍾惺もほとんど変らない。たださうとう体系的でめいせきな論理を持っている袁宏道の文学論に比べれば、鍾惺の方は実際批評の必要に應じてすこしずつ発言した形であり、したがってやや断片的で体系に欠けているくらいがある。けれども鍾惺の『隱秀軒集』の中に含まれている論・序・記・書牘などを読めば、それなりに彼が持っている文学像がつかまえられる。といつても作品の内容を重視しており、形式に關しての論議は見られないが、この点は袁宏道も同じである。

次に鍾惺の詩観を表わす一節を引用してみる。

夫詩、道性情者也、發而爲言、言其心之所不能不有、非謂其事之不可無而必欲有言也。以爲事之不可無而必欲有言者、聲譽之言也。不得已而有言、言其心之所不能不有者、性情之言也。

(詩は性情を言うものである。發して言にするのに、その心の中の有らざるを得ない所を言うのであり、その事の

中でなくすのができなくて必ず言おうとする所を言うのではない。おもうのには、事の中でなくすのができなくて、必ず言おうとする所のは声誉の言である。やむをえず言い、その心の中の有らざるを得ない所を言うのは性情の言である。『隱秀軒集』・晁集・「陪郎草序」

ここで「性情」は、その人だけが持っている本性、つまり個性の意味であり、袁宏道においての「性靈」と同じ意味でとらえられると思われる。「声誉」はよい評判の意味であるから、「声誉の言」とはよい評判を得るために言う言葉になるだろう。詩とは、心の働きによってやむをえず発する個性を表わすものであり、自分のよい評判を得るために言うものではないという意味になるだろう。

譚元春は次のように言う。

夫作詩者一情獨往、萬象俱開、口忽然吟、手忽然書、即手口原聽我胸中之所流、手口不能測、即胸中原聽我手口之所止、胸中不可強。

（詩を作る人の感情がひとり動けば、万象がみな開き、口はたちまちうたい、手はたちまち書く。すなわち、手と口をもともと心から流れて来るものに任せて、手と口は測る事ができない——何をうたい、何を書くかを——。心はもともと我が手と口が止る所に任せて、強制することはできない——いつ止るかを——。）

『譚友夏合集』・卷九・「汪子戊巳詩序」

上の譚元春の一節は、詩とはある時客観的対象、つまり境に触発され、作者の心から自のずからあふれて来る情を書くものであるという点を強調している。これは、まさに袁宏道の

非徒自己胸臆流出、不肯下筆、有時情與境會、頃刻千言、如水東注、令人奪魂。

（自分の心から流れて来るものではなくればあえて筆を取らず、ある時情と境が会えばたちまち千言を為して水が東の方に流れるように、人の魂を奪う。）『錦帆集』・「敘小修詩」

と軌を同じくするものである。ところで鍾惺の詩論の中では「真詩」という概念がよく使われている。鍾惺は『詩歸』を選したのは、古人の「真詩」を求めるためであると「詩歸序」の中で明らかにしている。またここで彼は「真詩」を、「精神所爲也」と定義している。つまり、「真詩」とは作者の「精神」―「性靈」・「性情」―が発露されている詩である。したがって古人の「真詩」を見れば、古人の「精神」と接する事になるのである。一方、「真」の概念は郭紹虞氏が『中国文学批評史』の中で言うどおり、袁宏道の詩論においても「変」の概念とともに核的な位置を占めている。袁宏道は「叙小修詩」^⑤の中で当時の詩を批判して、雷同のものが多くて後世に伝わる事ができないという。そしてもし伝わるものがあるとしても、それは民間の婦人と児童がうたう擘破玉、打草竿の類の民謡であって、その理由は「無聞」・「無識」の「真人」が作った「真声」であるからであると言う。袁宏道のこのような「真」に対しての認識の中には、李贄からの強い影響が認められるのはいうまでもない。「真詩」の意が「作者の自然の本性が発露された詩」と考えられるのは、袁宏道と鍾惺、どちらにおいても同じである。ただ鍾惺においては学問一般が「真詩」を作るのに障害としてうけとられているふしは見られない。むしろ質の高い詩を作るために「読書養気」を積極的にすすめている。この点は袁宏道と鍾惺の詩論において大きい差異点の一つだと思われる。またこの点は袁宏道と鍾惺が理想とする詩境ともかかわりを持っているので、後でもうすこしくわしくふれたいと思う。

(二) 公安派批判と「学古」

鍾惺が公安派を盲目的に追従する公安派の末流を批判したのはいうまでもないが、公安派に対する態度はどうだったろうか。鍾惺の師、雷思霈は公安派の門人であったし、鍾惺も袁氏兄弟と交際があり、袁宏道の死後『袁中郎全集』を撰している。このような関係を参酌すれば、竟陵派が公安派から少なからず影響をうけた事はまちがいないと思われる。また何よりも前で考察したように、擬古主義批判と、いわば「真詩」を主張した点で大いに通じるものがある。そして鍾惺が袁宏道個人に対してある程度の尊敬心を持って認めていたことは鍾惺の文集を読んでみれば感じとられる。しかし一方、公安派の文学観及び作品に対して常に距離をおいて、冷静でかつ批判的な態度を取った事も読み取られる。ここでまず鍾惺の公安派に対しての態度を考察してみたい。

次は万曆二十九年（一六〇一）、鍾惺二十八歳、まだ諸生の時に書いた文章で、彼の文集にのせられている公安派に対する批判の中で一番初めのものである。

「明詩無賞初盛、而有真中晚、眞宋元」。又曰……「近日尸祝濟南諸公、親盡且祧。稍能自出語、輒詫奇險、自我作祖、前古所無、而不知己爲中晚人道破。由其眼中見大曆前語多、長慶後語少、忘其偶合、以爲獨創。然其人實可與言詩」。

（「明の詩には真の初・盛唐はないが、真の中・晚唐、真の宋元はある」。また言う。「最近濟南の諸公——李攀竜ら——を崇拜する風潮はすこし遠くなった。やや自らの詩を作る事ができて、そのたびに「奇」・「險」をほこり、自分を祖とみなして、前に古人もなく、すでに中・晚唐の人が言いつくしたことを知らない。その眼の中には、大曆

——唐の代宗の年号Ⅱ七六六―七七九——の前の言が多く、長慶——唐の穆宗の年号Ⅱ八二一―八二四——の後の言が少ないから、その一致することに気づかなくて独創だと思ふのである。けれどもその人はともに詩を語るにさしつかえない。『隱秀軒集』・藏集・「明茂才私諡文穆魏長公太易墓志銘」

明詩には真の初・盛唐はないというのは当時初・盛唐の詩を模倣した前後七子らを否定するものである。そして真の中晩唐、真の宋元はあるというのは、公安派らの作品をすでに古人の中にあるものと言いながらも、それなりに仮のものではないと一応認めている。また李攀竜らを崇拜する風潮がすこし遠くなったと言ふことから、後七子を模倣する事に対しての傍觀的で批判的態度がうかがえる。鍾惺の公安派に対する批判は後になつてもその内容がそれほど変わらないが、上文の内容を要約すれば次のようになる。まず公安派の詩風を「奇」・「險」で評しているが、「奇」・「險」それ自体は鍾惺において必ずしも否定的評価だとはいえない。むしろ「奇」は「変」とも通じるものであり、「変」は鍾惺も求めるものである。もちろん注意すべき事は鍾惺は「変」のための「変」は高く評価していない。この点に関しては後でまた考察する事にする。けれどもここでは否定的評価に近いと思われる「奇」・「險」だけではほころぶものに足りない。それは後の公安派に対する批判を見ればはつきりとわかる。次は、鍾惺は公安派が古人を無視することに対して常に不満である。公安派の作品と同じ風格の作品がすでに古典の中にある事を強調して（望ましい「変」から遠い）、その原因は公安派が古人の「精神」を学んでいないからだとする。最後に、ともに詩を論ずるに足りるとした人が誰を指すかははつきりしないが文章の内容からみて（この文章の内容と似ている文章がまた二個所出るので次に引用する）、公安派の袁氏兄弟である事はまちがいないと思われる。ここでは公安派と竟陵派の文学觀には通じ合える余地があるのを暗示しているといえよう。

ところで鍾惺は万曆三十八年、三十七歳の時進士に合格した年にあらためて「平氣精心」をもって、「古人精神」の所在を追求することを決心したと「隱秀軒集自序」の中で明かにしている。そしてその時までの詩をほとんど削除して、百のうちの一つの詩さえも残していないという。つまり、鍾惺のその時までの古典に対する認識が、その間の文学活動を通じてもっと深化されたといえよう。そして進士合格（この年に袁宏道が死んだ）を新しい創作活動の出発点にしたといえよう。それにしたがってその時までの擬古主義者及び公安派の「古」を無視する態度に対する漠然とした批判意識をもっと高めるようになったと思われる。その時点までの公安派との接触からいろいろと影響されたと思われるが、それがどれくらいのものなのかをいうのは難しい。ただ鍾惺がたとえ擬古主義に対して終始批判的態度を取っていたとしても、だからといってその間たちまち公安派のいわゆる反古的態度に同調したとは思われない。それは前で引用した諸生の時に書いた公安派に対する批判の文章の内容と、鍾惺の文学観が確立された後書かれた次の文章の内容が、同じパターンであることからもうかがえる。

近時聰明者矯之曰。〃何古之法？ 須自出眼光〃。不知其至處、又不過玉川・玉蟾之唾餘耳。

（近來の聰明な人が出てこれ——擬古主義者——を矯めていうのに……〃何の古の法であるか？ 自ら真相を見ぬく力を出さなければならぬ〃と。けれどもそのすぐれている処がどこか知らない。また玉川・玉蟾の言説の余端にすぎない。）『隱秀軒集・往集・再報蔡敬夫』

聡明な人とはもちろん公安派のことをいうが前の批判より語調がもっと辛辣になっている事がわかる。玉川は中唐の盧全のことであり、彼の詩は一般的に「奇險怪僻」と評されている韓愈の詩と同じ風格のものとされている。そして盧

全の詩は『詩帰』にはただ二首しかのせられていない。ここから鍾惺の公安派の作品に対する評価がうかがえる。玉蟾は宋の道士、葛長庚の名であり、詩人としての彼の名はほとんど知られていない。やはり公安派の詩を低く評価していることを現わしているといえよう。鍾惺は「詩帰序」の中でもまた類似した内容の事を書いている。

今非無學古者、大要取古人之極膚極狹極熟便于口手者、以爲古人在是。使捷者矯之、必于古人之外自爲一人之詩以爲異。要其異又皆同乎古人之險且僻者、不則其俚者也。則何以服學古者之心？

(いま「古」を学ぶ人がいないというわけではないが、その要とする所は古人の極めて「膚」で、極めて「狭」で、極めて「熟」の、口と手につごうがよいのを取って古人がここにいると思う。さとい人にこれを矯めさせれば、かならず古人の外で自らひとり詩を作り、「異」のものだと思う。要するにその「異」のもとはまたみんな古人の「險」であり、かつ「僻」のものでなければすなわちその「俚」のものである。すなわちどうやって「古」を学ぶ人の心をしたがわせるか?) 『隱秀軒集』・尺集・「詩帰序」

結局、公安派に対する批判の内容が諸生の時期から文学観が確立された後である。「詩帰序」を書く時期まで一貫性を保っている事がわかる。このように鍾惺が常に公安派の「古」を無視する態度を批判しているのは、鍾惺と公安派の「古」に対する態度にギャップがある事を示しているといえよう。

では公安派と竟陵派は「古」に対してどういう態度を取っていたらうか。ここではまず公安派の文学史観の根本を為す「変」の概念について簡単に考察してみる事にする。公安派の「変」は、公安派文学論のもう一つ概念「真」と密接な関係がある。袁宏道は次のようにいう。

大抵物真則貴、真則我面不能同君面、而況古人之面貌乎？

（おおよそ物は「真」であればだつとい、「真」であればすなわち我の面と君の面は同じになれない。まして古人の面にいたってはなおさらである。）『錦帆集』・「與丘長孺書」

「真」であれば必ずから異なる事になる。したがって文学作品においても「真」のものは時代によって変化するものであるし、人によっても各々異なるものである。

また次のようにいう。

唯夫代有升降、而法不相沿、各極其變、各窮其趣、所以可貴。原不可以優劣論也。

（時勢には升降があるが、法は沿わなく、おのおのその変化を極まり、おのおのその趣を窮るから貴ぶべきである。もともとそれらによつて優劣を論ずるのは不可である。）『錦帆集』・「絛小修詩」

つまり、「法」は時代によつて変化するものであり、その点こそが貴ぶ所以になり、従つて時代をもつて優劣を論ずる事はできないという。ここで上で引用した二つの文の内容を合わせれば、「真」のものは貴ぶべきもので変化するものであり、逆に変化するものも貴ぶべきものになる。そして袁宏道はまた次のようにいう。

善畫者、師物不師人。善學者、師心不師道。善爲詩者、師森羅萬象、不師先輩。法李唐者、豈謂其機格與字句哉？ 法其不爲漢、不爲魏、不爲六朝之心而已。是真法者也。

（絵をよく書く人は、物を師とし、人を師としない。よく学ぶ人は、心を師とし、道を師にしない。詩をよく作る人は森羅万象を師とし、先輩を師にしない。唐を法る人はどうして機格と字句をいうのか？ 唐の人が漢を作らず、魏の詩を作らず、六朝の詩を作らなかつたその心を法る事が真に法る事である。）『瓶花齋集』・「絛竹林集」

真に唐の詩を法るのは、唐の詩人が漢、魏、六朝の詩を作らなかつたその心を法る事である。その事は結局既存の詩を変化する事であると同時に、森羅万象を師として自分の性情が発露された詩を作る事でもある。ところが創作者において真情の発露であるかどうかは創作者の主観的体験に属する事である。したがってこういう「真」は「変」であり、「変」は「真」であるという觀念の下では、ややもすれば「変」だけに走る結果を招きやすい。したがって袁宏道がたゞ觀念の上では「真に古を法る事」、すなわち「真の復古」を認めたとしても、実際には「変」のための「変」を追求する事になりやすいといえよう。袁宏道が「時文」、すなわち「八股文」の内容と形式においてのきびしい制約にもかかわらず「八股文」を詩・詞・曲と同じく位置づけ高く評価したのも、その時代性のためだという見解には同意するのである(6)。また作者が真情を作品化したとしても、それが必ずしも言葉を媒介体とするいい表現を得て読者にうまく伝わるとはいえない。まして「変」にこだわるとすればその作品の質が落るのは当然だといえよう。この点が袁宏道の詩論の弱点であり、鍾惺から「古を無視する」と批判された理由だと思われる。

では鍾惺の「変」に対する認識はどうだったろうか？ 鍾惺も詩文においての時勢の変化を認めていた。そしてその認識は前でもすでにふれたように、おもに後七子らに従う風潮が公安派に従う風潮に変わるのを目撃する事によって確認されたと思われる。それは次の一節からもうかがえる。

大凡詩文、因襲有因襲之流弊、矯枉有矯枉之流弊。前之共趨、即今之偏廢、今之獨響、即後之同聲。

(およそ詩文は、因襲に従えば因襲による弊害がおこり、それを矯めればそこからまた弊害が生じる。前にいっしょに追つたものがすなわち今はすたれ、今ひとりひびくものがすなわち後にはみんなの意見になる。)

上文での「因襲」はその当時においては後七子らであり、「矯枉」は公安派、「獨響」は鍾惺自身を指すといえよう。鍾惺はまた詩人の「変」を求める理想的態度について次のようにいう。

詩年運不能不代趨而下。而作詩者之意興、慮無不代求其高、高者取異於途徑耳。夫途徑者、不能不異者也、然其變有窮也。精神者不能不同者也、然其變無窮也。操其有窮者以求變、而欲以其異與氣運爭、吾以爲能爲異而終不能爲高。其究途徑窮而異者與之俱窮、不亦愈勞而愈遠乎？此不求古人眞詩之過也。

（詩文の時勢はよよ追つて下つて行く。詩を作る人の意興はおおむねよよその高いところを求め、高いところは「途徑」において「異」を取るのみである。「途徑」とは「異」ではないものがない、けれどもその「変」にはきわまりがある。精神とは同じではないものがないが、その「変」はきわまりない。きわまりがあるものをもって「変」を求め、その「異」をもって時勢と争おうとすれば、私おもうのに「異」を為す事ができて、ついに高いところに至らない。途徑を追究することがきわまれば、「異」もそれとともにきわまり、苦勞すればするほど遠ざかるのである。これは古人の眞詩を求めないから生ずるあやまちである。）『隱秀軒集』・尺集・「詩帰序」

鍾惺はここにおいて、まず詩文の時勢はよよ下ることであるという。そして詩創作の「精神」と、それを表現する手段、すなわち「途徑」に分けて「変」を論ずる。詩創作の「精神」は古今同じものである。けれどもその変化は無窮で、「精神」が表われている「眞詩」から得る感動は時代によって人によって異なる。一方、「途徑」は時代によって人によって異ならざるをえないものであるが、その変化にはきわまりがある。また「途徑」だけの变化から生れた作品は高い水準に至らないし、変化自体もすぐ行きつまってしまふ。ここからみれば古今の「変」も認識せず古の「途徑」だけを模倣する擬古主義者らはいかに足りるものではない。またすでに述べたように公安派の「変」を強調する文学観は、「途徑」だけをもって「変」を求める事になりやすく、作品もすでに古人の中にあるものにすぎないのである。だから

鍾惺は、古人の「真詩」の中で「精神」を見出して自らの「精神」と接触させ、新しい変化を求めようとするのである。鍾惺においても「学古」―古人の「真詩」を学ぶ事―の目的は変化を求めるためであり、学ぶ対象も古詩の「法」ではなく詩に表われている古人の心、つまり「精神」であった。しかし古人の心を学ぶことは、袁宏道においては結果的に袁宏道自身の心の動きに従う事を意味するが、鍾惺においては常に古人の「真詩」を読んで古人の「精神」と接触することであった。この差異点の故に鍾惺は公安派に対して常に批判的態度を取ったのである。またこの差異点の故に後の公安派と竟陵派に対する評判が分れるようになる。つまり、両派ともに擬古主義に反対して変化を求めた点だけに視点をあげれば両派ともに「反古」になる。また両派ともに古人の心を学ぶことを主張した点に視点をあげれば両派ともに「真」の復古主義者になる。しかし古人の心を学ぶ具体的な方法の差異点に視点をあげれば、自分の心に従う公安派は「反古」、古人の「真詩」から古人の「精神」を求める竟陵派はまた「復古」になるのである。

(三) 「靈」・「厚」・「深幽孤峭」

では袁宏道と鍾惺が目指した詩境は何だったろうか。袁宏道はたとえ作品に「疵處」があっても、それが作者の個性を表現しているのならよしとする文学観を持っていたので、できあがった作品の評価については多くを論じていない。袁宏道は「夫詩以趣爲主」⁽⁸⁾という。「趣」を定義すれば「性靈が発露されている作品なら必ずからでて来る自然なおもむき」になると思われる。だから「趣」の中には「清」・「遠」などいろいろの種類がありえるし⁽⁹⁾、「趣」がない作品は芸術作品だといえないのである。ここで注意すべき事は、袁宏道は「夫趣得之自然者深、得之学問者浅」⁽¹⁰⁾といい、「趣」を得るのに学問の役割を全面否定こそはしていないものの、消極的にしか認めていないという点である。こ

れはすでに考察したように、当時において「無聞」、「無識」の「真人」が作った「真聲」だけが後世に伝わるとしたのと同じ発想だといってよからう。

一方、鍾惺は袁宏道が詩文において「趣」を強調したのとすこし異なる見解を持っている。鍾惺は自身が編した『東坡文選』の序文の中で、当時李卓吾のように心眼を持っている人までも含めておおぜいの人が、蘇東坡の文章の「本末」を察せずに、漫然としてただ「趣」という一字で評価してしまうことを批判している。そして「趣」について次のように論じている。

夫文之於趣、無之而無之者也。譬之人、趣其所以生也、趣死則死。人之能知覺運動以生者、趣所爲也。能知覺運動以生而爲聖賢爲豪傑者、非盡趣所爲也。故趣者止於其足以生而已。今取其止于足以生者以盡東坡之文、可乎哉？（文において「趣」とは、「趣」がなければ文もないものである。人にたとえれば「趣」の故に人は生きるので、「趣」が死ねば人も死ぬ。人が物事を判別し、体を動かして生きるのは「趣」があるからである。物事を判別し、体を動かし生きる上に、聖賢になり豪傑になるのまでをみんな趣がするのではない。ゆえに「趣」とは生きる事である。いま生きる事で足りるに止まるものをもって東坡の文を尽すのが可能であるるか？）

『隱秀軒集』・景集・「東坡文選序」

というのは、東坡の文は戦国の文の「雄博高逸之氣」と「紆回峭拔之情」を保った上に、「仁義道德禮樂刑政之中」に出入するからである。では鍾惺において理想的文章に近い東坡の文章はどういう風格をもって評価されればいいだろうか。鍾惺においてそれは「厚」だと思われる。袁宏道の強調する「趣」は鍾惺においては「靈」におき変えられる。つまり、「靈」は作品を作り出すのに欠かせない靈感に止まる。「厚」はその「靈」を根底にしてさらに「あつみ」を加

えた理想的風格だと思われる。鍾惺は「靈」と「厚」との関係について次のように克明に説明する。

詩至於厚而無餘事矣。然從古未有無靈心而能爲詩者。厚出於靈、而靈者不即能厚。

（詩は「厚」に至ればもう余事がない。けれども古から「靈心」を持ったなくて詩を作った人はいない。「厚」は「靈」から出る。けれども「靈」がただちに「厚」になるのではない。『隱秀軒集』・往集・與高孩之觀察」

詩は「厚」に至れば外に気にかける事はない。しかし「厚」は「靈」から出るけれども「靈」だからといってみんな「厚」にはなれない。ではどうすれば「厚」に至ることができるだろうか。それに関して鍾惺は「必保此靈心、方可讀書養氣以求其厚」という。つまり、「靈心」を保った上に「讀書養氣」で「厚」を求めるのである。袁宏道の討論の中では、学問一般が疎外され、ひいては「真詩」を作るのに障害物とされたのに対して、鍾惺においては「讀書」が重要な役割を果たしていることがわかる。それはまた次の一節からもうかがえる。

人之爲詩、所入不同、而其所成亦異。從名人、才人、興入者、心躁而氣浮。躁之就平、浮之就實、待年而成者也。從學入者、心平而氣實、平之不復躁、實之不復浮、不得年而成者也。

（人が詩を作るのには入る所が異なり、成す所もまた異なる。「名」、「才」、「興」から入る人は、心があわただしく気が浮んでいて、あわただしいものがしずまり、浮んだものがみちるのには年を必要とし、その後詩を成す。「学」から入るものは、心がしずかで気がみちていて、しずかなものがまたあわただしくなることはなく、みちたものがまた浮ぶこともなく、年を待ったなくても詩を成す。『隱秀軒集』・昞集・孫曇生詩序」

学問が詩を作る入り口の一つとして認められている。その上、「名」、「才」、「興」から入る人が必ず年を取った後、

詩を成すのに比べて、「学」から入る人は年を取らなくてもそれなりに詩を成す事ができる。また年を取るにつれてもつと発展して行くので、もつとも安定した入り口だといえよう。鍾惺がここでいう「学」とは知識の蓄積ではなく、人格修養に近い意を持つていると思われる。それは鍾惺が、古人の「真詩」を学ぶ事において、古人の「精神」に合う事を目的にした事からもうかがえる。結局、公安派が詩を通じてうまれつきの性靈を発露することに止まったのに比べて、竟陵派は「讀書養氣」という工夫を通じてより高い次元の詩境、つまり「厚」を目指したといえよう。

ところで一般文学史と文学批評史の中で竟陵派の詩論及び作品は、「深幽孤峭」という言葉で特徴づけられている。「深幽孤峭」とは、錢謙益の『列朝詩集小傳』・「鍾提学惺」条から由来する。つまり、錢謙益は鍾惺について「摺第之後、思別出手眼、另立深幽孤峭之宗、以驅駕古人之上。」という。鍾惺の詩論の中で直接「深幽孤峭」という言葉は見あたらないが、詩に關しての彼のいろいろな言説を総合してみれば彼が想定している詩境は、たしかに「深幽孤峭」のイメージに近いと思われる。ここで「深幽孤峭」を訳してみれば、「静かで奥深く、かつひとりて超然としている。」の意味でとらえられると思われる。そしてそこからは現実世界からの距離感及び孤立感が感じられる。そしてこれは鍾惺が常に「孤」・「独」などの字をもって作者の個別性を強調し、詩を作るためにはわざわざわしい俗事から離れて「素居自全」する必要があるのを強調していることと「關係がふかいと思われる。結局鍾惺は「厚」と、「深幽孤峭」という言葉が象徴する詩境との二つの詩境を目指したといえよう。一見異なるように見えるこの二つの詩境が鍾惺の中でどういうふうに関和されていたかを言うのは難しい。ただ「厚」は鍾惺が目指した理想的詩境であるとすれば、「深幽孤峭」は鍾惺の実際の作風により近いということはいってよかろう。この意味で鍾惺という人間により近い詩境は「深幽孤峭」だといえよう。

四 「選」に対しての認識

鍾惺の文学活動の中で袁宏道に比べて目立つ点は「選」活動である。袁宏道も評選活動にまったく無縁だったといえないが鍾惺ほどの情熱はもっていなかったらしい。譚元春は「東坡詩選序」の中で、彼が「選」した「東坡詩選」は、袁宏道が「選」して家に残した東坡の詩を得て、自分が増減したものであると述べている。またいま伝えられてはいないが袁宏道が韓・柳・歐・蘇四大家文に批点を加えたという記録も見える¹²。しかし袁宏道がこれらの本に関心を見せたのはその作者らが袁宏道のもっとも好む作家だからである。鍾惺のように「選」自体について使命感をもっていたとは思われない。この点は袁宏道と鍾惺の創作態度にもかかわりがあり、彼らの文学活動を特徴づける重要点の一つだと思われる。すなわち、袁宏道はおもに創作者の立場であり、作品に作者の性靈さえ表わっていればいいので、作品のできのよしあしにはあまりこだわらなかつたといえよう。そして古人の作品に対しても、変えるのが法ることだという観念を持っていたから、あらためて古人の作品の中で典範を求める必要性がなかつたのである。それに比べると鍾惺は、やはりおもに創作者の立場から詩を論じている点では変りがないが、古人の「真詩」を求める「学古」を主張する立場からみれば、自ら古人の「真詩」を「選」して当時の人々に見せる必要性があつたのである。「選」という事は、すでに完成された作品を対象にする、自分なりの鑑識眼を必要とする批評家の仕事である。長い歴史にもかかわらず文学批評の分野ではあまり理論の発展を見せていない中国文学史の中で、「選」は實際的に多大な影響を及ぼして来た。それは孔子が「選」したといわれる『詩経』と昭明太子の『文選』が、中国文学史ではたした役割をみればすぐ理解できるであろう。だいたい明末という時期には「選」が盛んに行われた。その理由はいろいろとあげられる。まず経済發

展による市民層の拡大に伴って読者層もふえ、積極的かつ主体的に文学活動に参加するようになった事があげられる。また印刷技術が発達して、印刷のため「選」しなければならなくなった事、その時点まで蓄積されて来た膨大な量の作品から来る「選」の必要性、などがあげられると思われる。鍾惺の「選」活動がこうした背景を後にしている事はいうまでもない。ところが鍾惺の「選」活動には、当時の外の選家に比べて目立つ点がある。それは、当時の外の選家が必要に応じて「選」を行いながらも、「選」の重要性について明確な認識を見せていないのに比べて(彼らの文集の中で「選」に対する言説が見られない)、鍾惺は「選」その自体を非常に重視して、はっきりした認識を持って「選」を行ったという点である。この点は彼が『詩帰』の評選に傾けた情熱からもうかがえる。つまり、鍾惺は中国の古典の文人の中で珍しく「選」の批評的役割を認識していたといえよう。

次に、「選」に対する認識を始めとする鍾惺が持っていた批評家意識について考察してみたい。鍾惺は冷徹な性格の人で自身の詩作品の短所についてもよく気づいていた。そして自身の作品に「痕」がある事を認める言説が彼の文集の中に何回か出る。

夫所謂反覆於厚之一字者、心知詩中實有此境也、其下筆未能如此者、則所謂知而未蹈、期而未至、望而未之見也。

(いわゆる「厚」の一字を反覆するのは、心では詩には実にこういう境界があるのを知っているからである。筆を取った時この境界に至る事ができないのは、すなわち知っているが実行できなく、待っているが至らなく、望んでいるが見えないという事である。)『隱秀軒集』・往集・與高孩之觀察

この文は、『詩帰』が「厚」を反覆しているといえながら鍾惺の詩文は「厚」に達していないという友人の評に対し

ての答えである。鍾惺の批評家と創作者の間のギャップについての認識がよく表われている。鍾惺はまた次のようにいう。

夫錦繡千尺、善作者不必善裁、善裁者、不必善作、世固有不能詩而知詩者、予所裁決、或亦有以相中乎！

（千尺のしきをよく作る人が必ずしもよくたつのではない、よくたつ人が必ずしもよく作るのではない。世にはまことに詩を作る事はできないが知る事はできる人がいる。私が詩を評するのにも、あるいはまたあたるころがあるでしょう！）『隱秀軒集』・臧集・「簡遠堂近詩序」

鍾惺は自分自身をたとえて、世には詩を作ることはできないが知ることはできる人がいるという。謙遜の言葉でありながらも、創作の方より批評の方に自身をもっている事がうかがえる。ではこういう批評家意識の発露から始まるといえる「選」に対して鍾惺はどういう考えを持っていたのであろうか。

鍾惺のいう「選」の対象は大きく分ければ古人、当時の詩人、選者自身である。いずれの場合にも選者の批評眼を必要とする事は変わらないが、その対象によって「選」の意味がすこしずつ異なる。鍾惺において古典作品は理想とするべき典範である。それは古典作品は長い間伝わって来たからである。つまり、自然淘汰を耐えぬいて、作品としてその価値を認められたものだからである。そして古典詩を対象にして「選」することは、作品の価値の高低にも関係があるが選者の好みにもっとかわりがある。つまり、多い古典の中で、選者の心目に合うものがあればそれを「選」して編する。結果的に、その選書は、古人の「精神」が表われている古人の著書でありながら、同時に選者の性情も含めている選者の著書でもある。鍾惺のこのような考えは、『詩歸』について「此雖選古人詩、實自著一書」⁽¹³⁾といったことにもよく表われている。鍾惺のいう「学古」とは、このような「合述作爲一心、聯古今爲一人者」⁽¹⁴⁾のことを意味する。

そして、古人の「精神」と選者の性情がともに含まれている選書を今の読者が読むことよって、また古人の「精神」と今の読者の「精神」が接する。このように「古人の精神」を「後人の心目」に合わせる事が古典を「選」することの目的であり、また選者の権力である¹⁵⁾。

次に近人の詩及び当時人の詩を「選」することは、おおむね無駄な作品を「刪」して後世まで伝わる作品を「選」することである。この場合には「選」することにもっと価値概念が入る。つまり、性情が発露されている「真詩」、さらに「厚」の境界の作品を選ばなければならない。ところでこの場合、世の中の選者としての鍾惺に対する評判は「苛」であった¹⁶⁾。袁中道にも、鍾惺が雷何思の詩を「選」するのにおいて「精」を求め、だった二冊しか残していないのに対して不満をもらしている記録がある¹⁷⁾。ここからも鍾惺の「選」に対する情熱がうかがえる。

最後に、「選」の対象が選者自身である場合は、創作態度と深く関係する。鍾惺は次のようにいう。

選而後作者上也、作而自選者次也、作而待人選者又次也。

(選んだ後作るのがもつともいい、作った後自ら選ぶのはその次であり、作った後、人が選ぶのを待つのはその次である。)『隱秀軒集』・餘集・題魯文恪詩選後』

つまり、作った後「刪」されるよりは、作る前に作者が自ら選んで伝わるものを作るのが一番望ましいという。創作者には誰にも習作期が必要で、また傑作を生むためにはださくも必要であるのは当然だが、ここで鍾惺が言いたいのは創作態度の慎重性だと思われる。またこういう慎重な創作態度の強調からも、作品のできにしんけいを使う、創作者の中に潜んでいる批評家の姿がうかがえる。そしてこういう慎重な創作態度はたしかに公安派においては見られない点であ

る。

結局、鍾惺は袁宏道がおもに創作者の立場に止まったのに比べて、そこから一步進み、批評家の立場からも文学を論じる余裕を見せているといえよう。そしてその原因は鍾惺の生まれつきの冷静な性格及び「学古」の主張による「選」の必要性であると思われる。

(四) おわりに

もともと文人らの影響関係を正確にいうのは難しい。小論では竟陵派と公安派の文学作品は論議の対象にしておかないので竟陵派を公安派の継承発展者にするか、別の文学流派にみるかの問題についてはあえて結論を出さない。ただ竟陵派の文学理論及びその創作態度を、公安派と比べて考察してみたら、以下のような結果が出た。

鍾惺は公安派との交際から多くを得たに違いないと思われるが、一方公安派の「古」に対する態度及びその作品中・晩唐の風格と似ている事に対して、一貫して批判的態度を保っていた。それは両派の復古観にギャップがある事を示している。小論ではこの部分を少し明かにしたと思われる。次に袁宏道は詩創作において性靈が発露された作品を強調するのに止まったが、鍾惺はもっと質の高い作品を目指し、その具体的方法として「讀書養氣」を主張した。この点は両派の「古」に対する態度ともある程度かわりをもっている。つまり鍾惺は「古人」の「真詩」を「読むこと」を主張したのである。最後に、袁宏道がおもに創作者の立場に止まったのに対して、鍾惺はそこから一步すすみ、かなり明確な批評家意識を見せている。そしてその批評家意識はおもに「選」活動及び「選」に対する認識を通じて表われた。この点は鍾惺の冷静な性格及び彼が「学古」を主張したことと関係が深いと思われる。またこういってきかぬ作品

の完成度に気を配る批評家意識の発露から、鍾惺は慎重な創作態度を強調したのである。結局、両派の文学理論及び創作態度においては、以上のようにかなり多くの差異点があることがわかった。そして時期的に後に来る竟陵派の方が、公安派の方がある程度補完している役割を担当しているといえよう。

[注]

- (1) 『列朝詩集小傳』・丁集中・「袁稽勳宏道」
- (2) 研究論文集で『竟陵派与晚明文学革新思潮』がある(一九八七年・武漢大学出版社)。
- (3) 入矢義高氏「真詩」(『吉川博士退休記念中国文学論集』)。阿部兼也氏「唐詩帰詩評用語試探―“説不出”と“深”―」(『集刊東洋学』二十九号、一九七三年六月)。「詩評における逆説的表現のもつ意味について―唐詩帰の“静”、“深”、“幽”などをめぐって―」(『教養部紀要』十九号、一九七四年三月、東北大)。曹淑娟氏『晚明性靈小品研究』(天津出版社・一九八八年・台北)
- (4) 『隱秀軒集』・景集・「潘釋恭詩序」
- (5) 『錦帆集』
- (6) 『中国文学批評史』(上海古籍出版社・復旦大学・一九八一年)
- (7) 『錦帆集』・「敘小修詩」
- (8) 『華嵩遊草』・「西京稿序」
- (9) 『解脱集』・「敘陳正甫會心集」
- (10) 『解脱集』・「敘陳正甫會心集」
- (11) 『隱秀軒集』・景集・「簡遠堂近詩序」
- (12) 入矢義高氏「公安三著作表衰」(『支那学』十卷一号・一九四〇年十二月)
- (13) 『隱秀軒集』・往集・「與蔡敬夫」

- (14) 『隱秀軒集』・吳集・「二十一史撮奇序」
- (15) 『隱秀軒集』・吳集・「詩歸序」
- (16) 『隱秀軒集』・吳集・「徐元歎詩叙」
- (17) 『游居柿錄』卷十一・九一